

## 本号のテーマ：「地域の歴史を知る」

先日、久しぶりに本屋を訪れ、そこで「戦国三代と天下人」という本を偶然見つけた。

今年の7月1日に発行されたばかりの、639頁という分厚い本である。著者は、市村到氏。

略歴に臼田中学校長とあったこと、近年、古文書を読む会などを通して地元の歴史に興味を持っていたこともあり、早速手に取って目を通してみた。

この本は、「アシダ・シンパン」として語られることの多い芦田（依田）信蕃（ノブシゲ）の事跡を中心に、父である芦田下野守信守、子である松平康國・康眞の三代にかかわる事柄を記述したものであり、三人と関わり合う人物は、佐久の武将のみならず武田信玄、織田信長、真田昌幸、豊臣秀吉、徳川家康といったまさに日本史上の傑物に及び、その舞台は佐久地方から飛び出し関東一円にわたっており、その活動スケールの大きさに驚かされた。そして、

信蕃のこの功績を高く評価した家康が、信蕃の二人の子（松平康國・康眞）に、松平の姓と「康」の一字を与え、小諸城主としたということも初めて知った。加えてこの本が、著者の40年以上にもわたる研究の成果であることや山城等を自分で踏査している労作であること等にも感銘を受けた。

ところで、私は転勤の際にはまず赴任先の学校史に目を通し、校内に飾られている扁額や書、絵画の類の由来を調べた。そうすることで、学校に愛着を持つことが出来、



地域の人達の学校にかける長年の思いに気付くことができる。そしてそれは地域連携を円滑に進めることにもつながった。現在、教育委員として学校訪問をする際にも、校長室や廊下等にある美術品等に目を向け、地元出身の神津港人、荻原孝一、日向裕、鈴木公人、桜井寛等の絵画などを見つけると、

なぜそれがここにあるのかが知りたくなり、その由来を知ることによってその学校の佇まいをより身近に感じることができる。



知ることや学ぶことはそれ自体楽しいことであるが、さらに著者の市村氏は、佐久で活躍した芦田三代のことを知ることは郷土のアイデンティティーを考える上で大事であると述べている。例えば、山菜やキノコのことを知って山に入れば、その山の持つ本来の魅力に気付くことが出来ることがあるように、この本を読んで佐久の各地にあった山城のことなどを知ると、今までただの里山や丘や野原にしか見えなかったものにも、当時の人々の息遣いや生活の有り様が少し想像できるようになり、そこでの現在の暮らしの元の姿を垣間見ることが出来るような気がする。そしてこのことは、普段何気なく見ているものに知の光を当てると、それが多面的に光り出し、今まで見えなかったものが見えてくるし、普段から子どもをよく見てよく知る努力をすれば、今まで気づかなかった子どもの良さが見えてくる、そんなことにも通じるものなのかもしれない。そしてもちろん、こうした知ることへの渴望や学びの欲求を呼び起こすものが、その人に備わったセンス・オブ・ワンダー（不思議を感じ、感動する感性）であることはいうまでもない。